

進学大衆化時代の予備校生の進路選択

望月由起 (お茶の水女子大学大学院)

1、問題関心

1990年代半ば以降、少子化により高校卒業生の数が減少する一方、規制緩和により大学の数は増加している。その結果、大学や短大への進学は一部を除いてさほど難しくない状況にあり、トロウ(1976)の指摘に基づくと、近年の日本の高等教育は大学・短大への進学だけですでにユニバーサル教育目前の状態と言える。こうした量的拡大には質的变化を伴い、進学大衆化時代の大学や大学生の質的变化は多々指摘されている。

しかし進学大衆化による質的变化は、進学を志す受験生にもみられるはずである。竹内(1991)は、昭和40年代以降は、受験に努力と勤勉の強迫観念を伴わない時代が訪れたとし、これを「受験のポスト・モダン」と命名しているが、それはマス教育段階の受験生や受験生活を指摘したものとも言える。しかし予備校の現場で近年の受験生を見ていると、従来であれば卒業後の進路として進学を意識しなかった者も、進学大衆化を背景に、進学を含めた進路を選択するようになっており、さらなる質的变化が起きているように思われる。

そこで本研究では、ある大学受験予備校の「文系志望/学力中位クラス」の生徒を対象に、彼らの受験に対する態度や意識および進路選択過程を明らかにし、従来の予備校生との質的变化について考察することとする(対象となった予備校の「文系中位クラス」では、進学大衆化の影響から、進学を進路として考え始めたと思われる者を多く含んでいる)。

具体的な着眼点は以下の二点である。第一に、「なぜ浪人したのか」という点である。エリート教育段階では、関口(1965)も指摘するように、浪人も予備校も一部の難関大学を目指すごく一部の者のための特権的な存在であった。しかしマス教育段階以降、浪人も予備

校も特権的な存在ではないことは周知の事実である。では、進学大衆化時代の予備校生はどのような理由で浪人をしたのだろうか。

第二に、「志望レベル」と自分の「実力」をどのように適合しながら進路選択をしているのか」という点である。後藤(1956)は、エリート教育段階にあった当時の浪人生の浪人理由を「学力不足」とし、「所期の目的達成のために学力をつける」ことを浪人の目的と指摘した。

一方、塚田(1998)は1980年代半ばの調査から、マス教育段階の浪人生の1年間を「野心の冷却化」のプロセスと称し、高められた「志望校のレベル」を自分の「実力」に適合させ調整していくプロセスであると論じた。このプロセスは先の後藤の指摘にみられる、「志望校のレベル」に自分の「実力」を適合させるべく努力するプロセスとは対照的である。

竹内(1991)は、こうした変化の要因として、昭和30年代半ば以降の受験生は、受験の磁場に全国的な模擬試験による偏差値が導入されたために、受験以前に自分で「予期的」選抜を行うようになったことを指摘している。

では、進学大衆化時代の予備校生は、いかに「志望校のレベル」と自分の「実力」を適合させているのだろうか。その際に模擬試験はいかなる影響を及ぼしているのだろうか。

2、調査概要

<1>予備校生の浪人理由によるタイプ分析

第一の着眼点を明らかにするために、予備校の文系中位クラスに在籍する一浪生を対象に浪人理由調査を行い、近年の予備校生のタイプを浪人理由に着目して分析する。

<2>「志望校のレベル」と自分の「実力」の適合

続いて、第二の着眼点を明らかにするために、「志望校のレベル」と自分の「実力」の適合プロセスについて分析する。適合プロセスと

しては、エリート教育段階でみられたように自分の「実力」を「志望校のレベル」に適合するプロセスと、マス教育段階でみられたように「志望校のレベル」を自分の「実力」に適合するプロセスが考えられ、その両方のプロセスをみる必要がある。まずは、「志望校のレベル」に自分の「実力」を適合すべく、いかに学力を養成しているのかについてみていく。具体的には、「予備校の授業の欠席状況」「春期休暇・夏期休暇・冬期休暇の学習時間」を調査し分析する。続いて、「志望校のレベル」をどの程度自分の「実力」に適合させていくのかについて分析する。具体的には、入学時・9月・受験時における「志望校のレベル」を調査し、その推移について分析する。

さらに、適合のプロセスと模擬試験の影響の関連を探るために、「必須試験の受験状況」を調査する。

3、調査結果

〈1〉予備校生の浪人理由によるタイプ分析

浪人理由を主成分分析にかけた結果、「根本的に学力不足(学部学科へのこだわりがあったわけではない)」「志望大学のレベルが高すぎた」「志望学部学科にこだわりすぎた」の3成分が抽出された。それぞれの負荷量から、生徒をタイプ分けした結果、「根本的に学力不足(学部学科へのこだわりがあったわけではない)型(以下「学力不足型」とする)が約6割を占めた。彼らの記述からは、進学のために必要な学力をつける努力を高校時代にさほどしていなかったこと、将来にむけて具体的なイメージをもっていないことがうかがえた。

〈2〉「志望校のレベル」と自分の「実力」の適合

(1) 学力養成の度合い

① 予備校の授業への欠席状況

「学力不足型」の生徒の欠席日数は、他の生徒に比べ前期も後期も多く、その傾向は前期にはすでに顕著である。

② 春期休暇・夏期休暇・冬期休暇の学習時間

「学力不足型」の生徒の学習時間は、どの休

暇においても他の生徒に比べ短い結果となった。春期ではさほど差異がみられないが、夏期・冬期では明らかに差異が示された。特に「学部学科こだわり型」の生徒とは、どの休暇でも顕著に差異がみられた。

(2) 志望校のレベルの推移

「学力不足型」の生徒は、先の分析より他の生徒に比べて学力を養成する努力が欠けていることが示されたが、彼らの入学時からの第一志望レベルの推移は、9月も受験時も他のタイプと有意差は示されなかった。むしろ、「野心の冷却化」のプロセスをふんでいると考えられる「レベルダウン」に該当する生徒は、9月も受験時も「学力不足型」の生徒が最も少ない結果となった。

(3) 必須試験の受験状況

「学力不足型」の生徒の必須試験受験回数は、前期も後期も他の生徒に比べて少ない結果となった。前期は「学部学科こだわり型」の生徒と有意差がみられる程度だが、後期は両タイプの有意差が顕著になるだけでなく、「レベルこだわり型」の生徒との有意差も示された。

4、考察および今後の課題

今回の調査対象となった予備校生は、大学のレベルや学部にこだわりをもつために浪人したというよりも、努力不足による学力不足のために浪人した生徒が多い。彼らの進路適合プロセスは従来のものとは異なり、自分の「実力」を「志望校のレベル」に適合すべく努力をするわけでもなく、「志望校のレベル」を自分の「実力」に適合していくわけでもないことが示された。こうした背景には、彼らがマス教育段階においてクーリングダウンの役割を果たした模擬試験を受験しなくなる傾向があると思われる。

彼らは、自分の「実力」を直視せずに実際の受験をむかえている可能性が高いだろう。彼らの受験結果を調査し、進学後の適応・不適応についてもさらに考察していくことが今後の課題である。